

海外だより

リサーチ・トライアングル・パーク
滞在記

井上 毅*

筆者は1984年12月から1988年1月までの約3年間、アメリカ南東部ノース・カロライナ州にあるリサーチ・トライアングル・パーク（通称 RTP）に滞在し、アメリカのハイテク分野を垣間見る機会を得た。RTP はアメリカで最も成功したリサーチ・パークとして知られ、全米で50とも100ともいわれる各州のリサーチ・パーク構想の手本であり、また欧州や日本のテクノポリスなどの見本として、筆者の滞在中にも日本から何組もの視察団が訪問している。

そこで、RTP の紹介を兼ねて、アメリカの他のハイテクリサーチ・パークとの比較および RTP の成功の要因を雑感的に述べてみた。また垣間見たアメリカのハイテク分野についても若干触れる。日本のテクノポリス構想に少しでも参考になれば幸いである。

1. リサーチ・トライアングル・パークは……

アメリカ、ノース・カロライナ（NC）州の州都 Raleigh 市郊外にある、先端産業の研究開発を軸としたリサーチ・パークである。パークを中心として約15～20マイル内にある NC 州立大学、NC 大学および Duke 大学の研究機関を有機的に活用することを意図し、その三角形の中心部に設置されており、トライアングルの名はこれに由来している。このハイテク・パークには IBM, Northern Telecom, GE, DuPont Electronics, 住友電工（光ファイバー）、Bell Northern Research などのエレクトロニクス・通信関係および BASF, Ciba-Geigy, Rohne-Poulenc, Burroughs Wellcome などの薬品、バイオ関係、EPA（U. S. Environmental Protection Agency）、NIEHS（National Institute of Environmental Health Sciences）などの国立研究所など大小合わせて50～60の企業、研究所が集まっている。

RTP の総面積は約6000エーカー、昼間就業人口は約3万人といわれている。トライアングルの3大学の所在する Raleigh, Durham, Chapel Hill およびその周辺からなるいわゆるトライアングル地域の人口は約25万で、相当の割合が RTP および3大学の研究者であるため教育水準はきわめて高い。何でも理由をつけて No. 1 を称したがるアメリカ人は、ここを博士号保有率全米第一と自慢している。しかし、我々日本人から見れば、

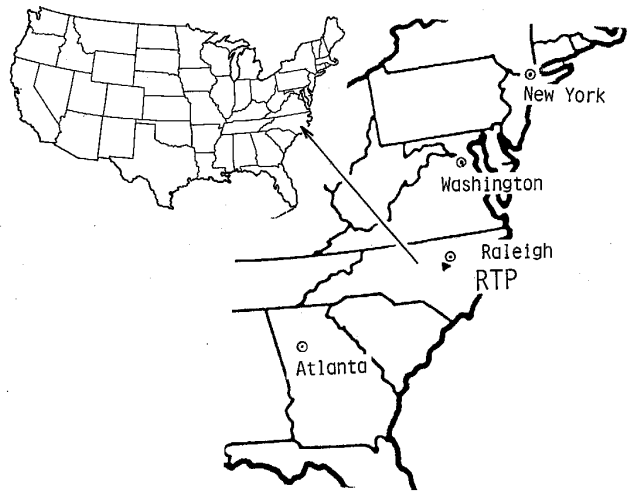


Fig. 1. The location of the Research Triangle Park (RTP), NC.

パーク全体がすつぱりと森の中にあり、車で走っているだけではここが50以上もの研究機関の集まるリサーチ・パークとは感じられない自然と、そうかといつて僻地感を感じさせないアメリカの中都市の魅力は大きい。また、航空路網はよく発達しており、ニューヨーク、ワシントン、ボストン、シカゴ、アトランタ等の大都市へは1～2時間で飛べ、これらの都市への日帰り出張は、東京-大阪間よりも遙かに楽で便利である。さらに、高度に発達した高速道路網により交通渋滞のイライラはほとんど経験することがなく、またニューヨークやロスアンゼルスに比べると治安は格段に良く、大都市からの移住者には大きな魅力となつている。少々 RTP の宣伝調になりすぎた感はあるが、この居住環境の良さこそが、RTP 成功の最大の秘訣であるといえ、日本でのテクノポリス構想を成功させる上で絶対に忘れてはならない重要なポイントであると思われる。

2. アメリカの三大ハイテクセンター

RTP は西のシリコン・バレー、東のボストン近郊ルート128と並んでよくアメリカの三大ハイテクセンターに挙げられる。しかし、これら三つの地域はそれぞれ異なる特徴、雰囲気をもつているといわれ、筆者も3年間 RTP に滞在し、またその間に何度となく他のハイテク・パークを訪問した経験からもこのことを強く感じた。

すなわち、シリコン・バレー（カリフォルニア州）はその名のとおり半導体、コンピューター産業を中心とした、ベンチャーの集合体としての性格が強い。今では既に世界的企業となつている HP（ヒューレット・パッカー）、インテル、アップルが成長を行い、今もまだ大学や大企業を Spin-out した研究者やアントレプレヌア（Entrepreneur）たちが集まり、あるものは大飛躍をし、またあるものはうたかた（泡沫）と消えていく企業

* (株)神戸製鋼所材料研究所 工博

戦場としての厳しさと、相互の協調と切磋が共存する活性があるように思われる。

一方、ボストンは NASA, DOD (国防省), DOE (エネルギー省) という政府色の強いビッグプロジェクトに何らかの関連を持つ研究開発先端産業としての性格が強いように感じられる。

これに対して、RTP は州の誘致政策として綿密に計画され人工的に作られたリサーチ・パークとしての色彩が強い。すなわち、前述したように世界に名だたる大企業の研究機関が集められており、良くいえば高水準と先進性に富み、反面これらの超一流企業は相互の協調、協力は必要としないという理由から、悪くいえば全体としての活性に乏しいという感は拭えない。

以上の特徴を私なりに感覚的にいえば、生馬の目を抜くようなシリコン・バレー、やや Snobish なボストン・ルート 128, そしてサザンホスピタリティーそのままの、のんびりと大様な RTP ということになりそうである。

3. RTP の成功要因

ハイテク産業を導入し、これを核として先進性のある州経済へと発展させることは全米各州の願望である。この意味で、典型的な農業州ノース・カロライナ州が他州に先駆けて RTP の巨大プロジェクトを成功させ、州の近代化を果たしたことは、他州の垂涎的であり、その成功要因については多くの研究がなされている。それらを要約すると、(1) 周辺の優秀な大学との連携による優れた研究環境、(2) 医療、教育などの優れた生活環境、(3) 自然、気候条件の良さ、(4) 空港、ハイウェイなど交通の整備、(5) 質の高い労働力、税制面などの投資環境の良さなどが挙げられている。

しかし、これらはごく一般的な必須条件であり、RTP の歴史や現状を見ると、その成功の裏にある人間的側面をもう少し補足する必要があると思われる。まず第一は、このようなプロジェクトを他州に先駆けて一早く打ち出した先見性である。ノース・カロライナはタバコ、繊維、家具木材を州の基幹産業とし、最も早く構造変革を迫られたことは結果的には幸運であつたが、この幸運にタイミングよく構想を打ち出した州政府の指導者の先見性がきわめて大きかつたと思われる。この点は、構造不況に直面し見事に変身をとげる企業と凋落していく企業とに共通する点が多い。

第二は核となる目玉を掴むこと。RTP といえども順調に成功した訳ではない。1956 年に RTP 委員会が発足して以来何度となく蹉跌の危機に直面したが、1965 年に 7 年におよぶ交渉の末 IBM の誘致に成功したことが成功への転期となつた。(RTP 内の IBM 従業員は発足時 2500 人、現在 7000 人を擁し、NC 州は NY 州に

次いで IBM 第 2 位の拠点となつている。)

最後に、ハイテク・パークといえども人間の住む所である。内部または周辺の住環境として、ともかく“住んでみたい”という気になるものでなければならない。医療はもちろん、特に日本では子女の進学ということが大きな要素となるので、それを満足させる教育環境は無視できない。また文化、娯楽など余暇の充実感を与えること、既存の大都市へ気軽に出れるという距離であることも大切である。例えば日本のテクノポリス構想が過疎対策と考えているなら絶対に成功しないであろうし、もしできたとしても単身赴任者のすさんだ町ができるだけとなろう。ちなみに RTP 地区 (Raleigh) は数年前にアメリカのある雑誌の行つた、住んでみたい町の人気投票で全米第 3 位であつたとのことである。

4. アメリカのハイテク分野の印象

3 年間程度の滞在でアメリカのハイテク事情について語るには短すぎるので印象を述べるにとどめたい。私はよく、今日のアメリカのハイテク分野を例えて第二のゴールド・ラッシュと呼んでいる。その理由は、金のナゲットに代わつて Si チップを追い求める Forty-niners (1849 年ではないが)、一獲千金を夢見て大学や企業を Spin-out する連中など、当時を思い起こすに十分であり、またアメリカ人のロマンにぴつたりの気がしてならないからである。

たとえ失敗しても食うには困らないというアメリカン・オプティミズムが背景にあるにしろ、ともかくアメリカのエリートは“Entrepreneur”に憧れ、ロマンを感じるようである。華々しく散つていくものにも、また大成功をとげたものにも等しく拍手を送る明るさがある。

ところが、ここにもまた日本が現れた訳である。それもユニフォームで画一化された企業組織を背景にじわじわと浸透してきて、気がつくとアメリカが隅に追いやられているという事実、たいへんな苛立ちと焦りをあらわにしているように感じられてならない。

昨年 7 月ワシントンで開かれた高温超電導会議でレーガン大統領が特別スピーチを行い、ハイテク分野ではアメリカの威信をかけて世界をリードするとの意気込みを示し、会議は終始競争相手を日本一国に絞つていたことが強く印象に残っている。今後、日本が自国の利益のみを優先させた研究開発を押し進めれば、ことあるごとにハイテク摩擦が起こると考えなければならない。

日本が、研究、開発、生産において国際化を進めるに当たっては、成果や利益は共に享受するという基本姿勢を明確に示していくことがますます重要になつてくると痛感した。